袴田巌さんのこと

冤罪の危険は高まっている

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会（そばの会）

　私たちは日本の死刑制度に疑問を持ち、死刑執行の即時停止を願い、長勢甚遠法務大臣が死刑執行命令を出さないことを求めています。

☆★☆

　今、日本の死刑確定囚は百人近くになっています。そして、小菅の東京拘置所には四〇人を越す死刑確定囚が生活しています。その中には冤罪を訴え、再審請求をしている方も少なくありません。無実の元プロ・ボクサー、袴田巌さんのことはご存知の方も多いでしょう。

　１９６６年に静岡県で起こった一家４人が殺害された事件で、犯人とされた袴田さんは無罪を主張し続けましたが、１９８０年に死刑判決が確定してしまいました。

☆★☆

　家族や弁護士以外との面会・文通が禁じられた中での長きにわたる拘禁生活と死刑囚というプレッシャーの中で、袴田さんは家族との面会も拒否し、妄想の世界に閉じこもるような状態が続いていましたが、本年一一月二〇日、家族や弁護団との面会に三年八カ月ぶりに応じ、ボクシングの話題になると「輪島さんは知っている」等と話すようになったそうです。元世界王者の輪島功一さんらがボクシング界をあげての再審支援運動に立ち上がっていることを受けての反応のようです。輪島さんらとの面会が認められるようになれば、袴田さんの症状はいっそう好転することでしょう。

★☆★

　今でこそ、袴田事件は冤罪だと広く知られるようになってきましたが、逮捕当時の報道は袴田さんを犯人と決めつけ、「身を持ち崩した元ボクサー」という報道が盛んになされました。輪島さんたちは、袴田さんもその偏見の犠牲となったんだと、ボクシング界で訴えています。

★☆★

　そのような冤罪事件は昔の話だ、今はそんなことはないだろうと思われている方も多いようです。しかし、袴田事件は様々な疑問が指摘されながらも、今なお再審も認められていない現実があります。

　また、冤罪の危険性は一層高まっているように思われます。例えば「和歌山毒カレー事件」の被告である方が冤罪を訴えていることを、私たちはどれほど受けとめているでしょうか。テレビをはじめとしたマスコミの、容疑者＝犯人と決めつけてのバッシングは袴田事件当時の比ではありません。

★☆★

　死刑確定囚の中には自ら控訴や上告を取下げて確定してしまった人も少なくありません。それは罪を認めてのことだから、とばかりに、そうした方がまず執行の対象とされています。

　しかし、それらの人たちも本当は別の言い分があったのかもしれません。裁判が続きこうしたバッシングを受け続けることは耐え切れない、さっさと死刑を受けたほうがまだマシだ……そんな気分にさせていることはないでしょうか。死刑事件に限らず、多くの冤罪事件で虚偽の自白を強いられてきた背景にはそうした圧力があったのですから。

★☆★

東京拘置所では２００１年１２月２７日以来、死刑の執行は行われていません。建替えの時期でもあったからでしょうが、所長以下、職員の方々もこのまま執行しないで済めば……と思われていることでしょう。誰だって死刑は避けたいのです。その願いに応える権限を持つのは、長勢法務大臣、あなたです。